



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	参加型貧困調査の実施について : 「参加」に向けた調査の手続きを中心に
Author(s)	陳, 勝; Chen, Sheng
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 140, 203-225
Issue Date	2022-06-25
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/b.edu.140.203">https://doi.org/10.14943/b.edu.140.203</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/86265">https://hdl.handle.net/2115/86265</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	13-1882-1669-140.pdf



# 参加型貧困調査の実施について

## —「参加」に向けた調査の手続きを中心に—

陳 勝\*

【要旨】 本論文は、参加型貧困調査の実施について、先行研究から提示した課題に対して、実際の調査の実施を通して、具体的な課題と必要となる対応を検討した。結果は、①参加者の募集では、課題であった調査の情報伝達と環境整備に対して、中間協力者や反貧困組織の協力、参加しやすいような調査の場所や時間の設定、金銭を含む各種サポートが必要とされた。②調査の進行では、話題の設定と議論の展開が課題であった。本調査は調査の目的、主旨、大枠且つオープンな主題を提示できるような議論のプラットフォームを作成することで、参加者たちの関心のあることを議論できるようにした。そして、グループディスカッションという形式を取ることで、参加者と調査実施者、そして参加者同士の間の権力関係の不平等が生じることをできる限り回避し、参加者同士の間のインタラクティブな議論の進行と展開を実現し、さらに、議論のなかで参加者たちの用いた言葉を彼ら自身で説明するように促進した。③調査結果に関して、主に参加者の確認とコメントを経てからアウトプットを行った。その際、内容の確認だけでなく、文章をどのように表現するかについての参加者たちの意見も提示してもらった。

【キーワード】 貧困当事者、参加、参加型貧困調査、調査の手続き

## 1. はじめに

### (1) 本論文の目的

参加型貧困調査について、陳(2021)はこれまでに海外で行われてきた代表的な調査実例をレビューし、調査実施上に以下の3つの課題があると分析した。

第1は、参加者の募集に関する課題である。調査参加者である貧困当事者は実際の生活上に様々な困難や事情を抱えているため、調査参加に多くの制約があることが考えられる(陳2021)。調査に関する情報をどのように参加者に届け、完全に理解してもらえるか、そして、どのように参加しやすい調査環境を整備するか、参加者の参加の意思決定にマイナスの影響を与えないかなどを考慮しなければならない。第2は、調査の進行に関する課題である。参加型貧困調査で最も重要であるのは、参加者が自らの関心を調査のなかに持ち込み、それについて自由に発言や議論ができるようにすることである(陳2021)。そのため、調査の進行において最も難しいことは、如何にして(調査実施者ではなく)参加者自身によって具体的な話題を設定し、そして、それを主体的に議論し展開していくことができるかということである。第3は、調査結果のアウトプットに関する課題である。参加者を調査結果の編集のプロセスに含めることがより正確なアウトプットに繋がる(陳2021)。そのため、参加者は調査進行中に単に情報を提供するだけでなく、そこから得られた調査結果が自分たちの意思に沿っているのか、今

---

\* 北海道大学大学院教育学院博士後期課程

後、その結果を文章化する際にどのようにまとめて表したいかなどについて、参加者は直接に執筆しなくても、それについて確認や意見を表明する権利がある。この段階では、この権利が如何に実現できるかが問われている。以上から陳(2021)は、参加型貧困調査の実施にあたって「貧困当事者が調査参加にあたって制約がなく、調査過程に関与ができるようにすること」が、調査の参加者である貧困当事者の調査への「参加」を保障していくためには重要であると考察した<sup>1</sup>。

本論文は、上記の3つの課題に対して、日本で実際に参加型貧困調査を実施し、そこで具体的にどのような課題が出てきたのか、それをクリアするために何が必要なのかを検討することが目的である。そのため本節の以下は、本論文の研究対象を紹介する。その後に「参加」の保障を焦点に当て、実践的なレベルから調査実施上の課題を検討する(第2, 3, 4節)。具体的には、陳(2021)が指摘した「調査参加者の募集」「調査の進行」「調査結果のアウトプット」の3つの課題に対して、実際に調査を行うなかであがった具体的な課題とその対応(本論文ではこれらの一連を実施する過程を「調査の手続き」とする)を説明していく。最後に、全体をまとめて終わりとする(第5節)。なお、本論文で説明している調査の手続きによって得られた具体的な調査結果に関しては、別稿にて紹介していきたい。

## (2) 本論文で検討する調査の概要

本論文で検討する調査は<sup>2</sup>、2021年1月から同年10月までに本論文の執筆者が実施したものである。調査の目的は、貧困当事者が「貧困」を語ることによって貧困当事者の主体側から「貧困」を理解することである。調査参加者は、北海道を中心に貧困経験がある若者(18歳から30代以下)である。具体的な構成は以下の表1が示している通り、男性・女性、学生・社会人、日本人・外国人、すべて50%対50%であり、計32人、8グループである<sup>3</sup>。

---

<sup>1</sup> この「参加」が保障されたことによって、調査参加者である貧困当事者はより主体的に貧困に対する考えや見解を語るができる。

<sup>2</sup> 本調査の実施及びそれに関する研究分析は、「北海道大学大学院教育学研究院における人間を対象とする研究倫理委員会」の承認を得ている(若者から見た「貧困」に関する研究(20-34))。なお、本調査は、2020年度貧困研究会「貧困研究奨励基金」(研究者:陳勝, 研究題目:貧困当事者が公的援助制度を語る一参加型貧困調査を通じて一)による。2021年度以後は「科学研究費補助金基盤A:子ども・子育て家族の貧困と政策・実践:『包括的最低限保障』の構想のために, 21H04404, 研究代表者松本伊智朗」の一環として行われている。

<sup>3</sup> 外国人も参加者として含まれている理由は、同じ日本社会(北海道)に暮らしているのに、「外国人」であることによって、「参加」から排除されることを避けたいという観点からである。

表1 調査対象の詳細

グループ	人数	詳細状況
日本人学生・男性	4人	全員が奨学金（ローン）を受けている。なかには、生活保護世帯出身、母子家庭出身、親との関係が悪く金銭的な支援が一切ない、アルバイトで生活費と学費を維持する、などの状況が重なっている。
日本人学生・女性	4人	
外国人留学生・男性	4人	コロナでアルバイトの収入が少なくなっている、加えて、留学中に本国にいる家族は病気などのアクシデントがあったため、本国からの支援が少なくなっている状況である。
外国人留学生・女性	4人	
日本人社会人・男性	4人	全員に非正規労働経験がある。なかには、経済的な原因で大学進学できなかった、何年間かのフリーターを経験してきたなどの状況が含まれている。
日本人社会人・女性	4人	全員がひとり親であり、生活保護を受給した経験がある。また、なかにはホームレス経験を持つ人もいる。
外国人労働者・男性	4人	多くは結婚も出産も早く（結婚する意欲があるが、お金がなくて、結婚できない方もいる）、家族を養う負担がある。また、ほとんどの方に債務がある。本国で生活が困難であり、他にお金を稼ぐ方法がなく、「〇〇（業種）」 <sup>4</sup> 労働者として来日。
外国人労働者・女性	4人	

調査方法は、参加型貧困調査である。具体的に、属性が同一の4人で1つのグループにし、8グループとした。各グループは毎回1週間～3週間の間隔をあけて3回集まり、調査を行った<sup>5</sup>。3回ごとの調査内容としては、1回目は「貧困に対するイメージや理解」、2回目は「生活上の心配や困りごと」、3回目は「調査の結果確認とコメント」である。

それぞれのグループの調査実施場所に関して、学生の4グループ、日本人社会人男性の1グループは、札幌市内の公共施設等の会議室で行った。外国人労働者の2グループは調査中間協力者が所有する現地の部屋で行った。日本人社会人女性の1グループは協力組織が所有する会議室で行った。

以上、本論文で検討する調査の概要を紹介した。次節から、前述の陳（2021）が論じたこのような参加型貧困調査実施上の課題：1. 参加者の募集に関する課題、2. 調査の進行に関する課題、3. 調査結果のアウトプットに関する課題に対して、本調査の実施を通して、実際に出てきた具体的な課題とそれをクリアするために必要とされた対応を詳しく検討していきたい。

<sup>4</sup> 個人情報保護のために、本論文では調査参加者を特定できる内容を「〇〇」で表記している。

<sup>5</sup> そのうち、外国人留学生男性グループでは、1名が1回目のみ参加した。日本人社会人男性グループでは、1名が1回目と2回目だけ参加した。

## 2. 課題1－参加者の募集

本調査は、「当事者の立場から貧困を議論する」という主旨で、学生／社会人、日本人／外国人、男性／女性のグループ別に参加募集を行った。学生の4グループは、基本的には個人の繋がりやSNSネットワークを介して、情報を拡散した。外国人労働者の2グループは中間協力者、そして、日本人社会人の2グループは札幌にある2つの反貧困組織の協力で募集できた。情報を拡散し、また協力者や協力組織にお願いする時に、しばしば「貧困に関する何らかの証明が必要か」「どういう貧困基準で募集するか」と聞かれた。それに対して、調査実施者は「証明は要らない／基準を指定しない／本人が生活を営む上で経済的余裕がないと感じていれば」と答えた。その結果、表1で示しているように、生活保護受給者、ホームレス経験者、ひとり親、非正規労働者、無職経験がある方、大学に進学できなかった方、低所得者、多重債務者、母子家庭出身者、生活保護受給世帯出身者、奨学金（ローン）受給しながらアルバイトで生活や就学を維持する方、などの多様な貧困経験がある当事者を幅広く包摂できている。このような参加者たちからなった8グループのなかで、募集の際により多くの努力を要したのが外国人労働者の2グループと日本人社会人女性グループである。以下、参加者を集める際に、特に工夫した点を説明する。

### (1) 調査情報の伝達

外国人労働者の2グループに関しては、調査実施者が事前に作った募集ポスター（電子画像）と簡単な分かりやすいショートメッセージを北海道地域の外国人SNSネットワークを通じて拡散し、外国人労働者と繋がりがある人（本調査の中間協力者）と繋がった。中間協力者の協力意思を得たうえで、中間協力者の個人的な繋がりによって参加者を募集できた。外国人労働者の2グループへの調査説明は、まず中間協力者に調査説明書を送付し、加えて、電話での説明も行った。これにより、調査を理解した中間協力者に、対象者に分かりやすく伝えてもらうことが可能となった。外国人労働者たちは外部からの調査に対して強い警戒心があり、また長い専門的な文章を読むのも苦手で、調査説明書だけで調査を理解することは困難である。そのため、信頼できる中間協力者からの丁寧な説明、そして調査開始から最後まで付き添いやフォローがなければ、参加の意思決定が難しい<sup>6</sup>。加えて、付き添いやフォローがなされることは、事前に参加者に伝えられている必要がある。

日本人社会人女性グループも同様に、協力組織がなければ、最初に調査参加者を募集する情報が当事者に届きにくい。また情報が届いても、参加者たちがよく通っている、信頼できる組

---

<sup>6</sup> 外国人労働者たちの警戒心の高さの背景のひとつとして、日本社会についての知識や情報を多く持たないゆえに常に何かで騙されることを心配しているということが、調査開始後に判明した。ただし彼らは、日本について理解できないことが多い中でも、外部の人と交流したい、自分の状況について話したい、自分のことを理解してもらいたいという気持ちを強く持っている。なお、外国人労働者で、中間協力者のルートではなく、SNS上の調査募集情報を見て個別に直接連絡のあったケースでは、説明を受けてもなかなか調査を信頼できないこと、謝礼が手渡しで現金でないこと（理由は本文にて後述）、札幌と6、7時間離れており交通手段のない所にいること、などの理由で参加できなかったこともあった。

織の人の付き添いやフォローがなければ、参加の意思決定が難しい。そのため、調査実施者は情報を伝達する段階で、協力組織と2回の事前打ち合わせを行い、参加者を募集するための事前準備を検討した。

## (2) 調査環境の整備

参加者たちは、様々な事情を抱えて、スケジュールもタイトである。そのため、1グループの4人が3回集まって議論するには、アクセシビリティや参加のコストなどの問題を配慮しなければならない。以下、前述の調査情報の伝達以外に、調査環境と関する場所、時間、車の送迎、謝礼とそのほかのサポートについて、どのように設定したのかを説明する。

### 1) 場所

場所の選定について、参加者が参加しやすい場所、そして、できるだけフォーマルな会議室を用意した。その理由は参加者にアクセス上の制約がないようにすること、安全・安心と感じられること、そして、本当に尊重されているように感じられること、この3つである。具体的には以下である。

学生の4グループと日本人社会人男性グループは、地下鉄駅付近のレンタル会議室で行った。地下鉄から上がるとすぐに会議室にアクセスできるため、悪天候や交通不便などの影響で参加を諦めることを避けられた。

外国人労働者の2グループに関しては、参加者たちは札幌から遠く離れた公共交通手段のない場所にいるため、札幌で調査に参加してもらうことが不可能な状況である。そのため、中間協力者が所有する当地の部屋を借りて、調査を行った。参加者たちは以前もその部屋に行ったことがあり、比較的慣れた場所である。会議室ではないが、できるだけフォーマルな雰囲気を作るため、席のレイアウトや名札立てなどを用意した。また、現地で調査を行うとはいえ、参加者それぞれが山間地域に分散して居住しているので、車で送迎した。

同様に日本人社会人女性グループは、参加者が普段通っている組織の会議室で行った。慣れた環境のほうが適しているためである。

### 2) 時間

時間（集まりごとの長さ）に関して調査は3回の集まりを持ち、1回目は調査説明や調査手続きを行うことが必要であるため2～2.5時間とした。2回目と3回目は各1.5～2時間とした。このように設定した理由は、プレ調査（2021年の1月～2月に実施）において、1回の集まりを1時間以内で終えた場合に4人の参加者のうち1人程はあまり話ができず、十分に意見表明ができないまま終わってしまった経験による。一方、長時間の調査参加も、多くの参加者が様々な事情を抱えているため困難である。以上を考えると、1回の集まりは休憩時間を含めて1.5～2時間程度で設定した。なお、参加者の状況に応じて、遅れての参加や早退などもできるように対応した。この点に関しては、調査情報を伝達する段階で参加者に伝えた<sup>7</sup>。

以上のように、集まる際にどのぐらいの時間を設定するかを決めたが、その次に、日程の調

<sup>7</sup> “フル”の参加より“最適”な参加がもっと意味がある（Bennett & Roberts 2004）。無理に所定の時間すべてに参加するのを要求すると、かえって参加の制約になる恐れが考えられる。

整が必要となる。日程調整の段階では主に以下のような工夫をした。

学生の4グループに関しては、参加者の授業やアルバイトと重ならないように週末の朝か平日の夜の時間帯に調整した。そのうち、外国人留学生の2グループは、コロナの影響でアルバイトが激減し、空き時間が多く、時間調整に難は特になかった。一方日本人学生の2グループの参加者は、学校やアルバイトなどでそもそも空き時間が少なく、さらに夜間大学に通っている方や、週に5,6日間でアルバイトをやっている方もいるため、時間の調整にはかなりの努力を要した。

外国人労働者の2グループの参加者たちは、月曜日から土曜日まで仕事をするため、調査は日曜日しかできない。事前に決められるのは、どの週の日曜日に行くかということだけであり、開始時間を事前に決めることは不可能である。その理由は、随時に残業が入ってくるので、残業はいつ終わるかも不確定である（天気によって仕事が変わる）。そのため、調査実施者は朝から現地におもむき、中間協力者と合流して待機し、集まれそうな状況となったらすぐに開始することとした。

日本人社会人女性グループに関しては、仕事を掛け持ちして月に2日間しか休みがない参加者もいるため、全員が集まれる日程が少なかった。そこで、全体の調査期間を長くとることで対応した。3回の集まりを終えるのに2カ月間弱の時間がかかった。

### 3) 謝礼

調査への参加にはコストがかかる。交通費、時間、エネルギーがかかることはもちろん、参加している時間は仕事ができず、その分の収入が減ることや、子どもと接する時間や自身の休みが減ってしまうことなどである。これらのコストを参加者に負わせてはならない。また、参加者は確かに貧困に関する専門知識を持っており、参加の場で自分なりの貧困分析という形で研究に貢献しているのであるから、その貢献・労働にふさわしい謝礼が必要である。本調査では、参加のための移動時間も含めて、参加者が調査のために半日間の時間を確保する場合も考慮した上で、その時間と相当する金額に謝礼を設定した。

ただし、実際の支給は金額相当のクオカードだったため、一部の参加者に不便をかけた。調査実施者側の都合で、支給できる謝礼はクオカードか現金のみである。現金の場合は、事前に参加者の通帳情報を、調査実施者が所属する組織に提出し、銀行振込で支払うこととなる。しかしながら、多くの参加者、とりわけ外国人労働者には強い警戒心があり、通帳の情報など個人情報を外に提供することに対して忌避的であるため、銀行振込による支払いは不可能である。一方クオカードでの支払いについても、外国人労働者はそもそもクオカードが何であるかを知らず、また不便な場所に暮らしているためクオカードを使用できる施設も身近に無い。よって、最終的にはまず調査実施者がクオカードを参加者に配って、その後中間協力者の助けのもとで、中間協力者が現金で参加者のクオカードと交換することで解決した。

### 4) サポート

#### ① 車での送迎

参加者の属性によって、車での送迎が必要となるグループがある。例えば、外国人労働者の場合は、現地で調査を行うというものの、参加者それぞれが山間地域に居住し、仕事の時間も頻繁に変わるので、随時に送迎できる車が不可欠だった。この点に関しては、中間協力者の車

で対応した。ただし車があっても、それぞれ分散しているため1グループの4人が全員集まるのには1時間半程度かかった。

また日本人社会人女性のグループに関しても、参加者全員が30代のシングルマザーであり、小さい子どもがいるため、できるだけ移動時間を縮小し、子どもと離れる時間が長くないように協力組織の車で送迎した。

## ② 食事の用意

外国人労働者グループでは、参加者全員が合わせられる時間は限られている（雇用主が違い、仕事の場所は分散しているため）。限られた時間内で調査を実行できるように、調査実施者と中間協力者は、参加者が働いている場所と少し離れている場所で車の中に待機し、仕事の終わった参加者をすぐに車に乗せるようにしていた。そのため参加者は自分の居住場所に帰って食事ができない、或いは（コンビニやスーパーも近隣に無いため）食べ物を買って参加の場に持参することもできない。よって、調査実施者が事前にお弁当やおにぎりなどを用意し、参加者が空腹のまま参加することのないように留意した。

## ③ 文字書きの手伝い

外国人労働者の参加者のなかには、文字を書くことが苦手な方もいた（調査中に文字の読み書きを最小限度までに減らすように配慮した）<sup>8</sup>。書く必要が生じた場合は、「携帯で調べてもいいよ」というアドバイスをした。また、本人の意思に沿って調査者実施者が代わりに書くこともあった。

## 3. 課題2－調査の進行

調査進行において課題となるのは「調査の話題設定と展開」と「調査参加者の権力関係」である（陳 2021）。つまり、貧困当事者が主体的に調査の話題や内容の形成に関与し自分の関心を調査に組み込めることと、調査実施者と調査参加者、そして参加者同士の間に関力の不平等が生じないことが求められている。本調査はこれらの課題点を意識しながら以下のような対応で調査を進めた。

### (1) 話題の設定

参加型貧困調査を行う際に、調査の目的、主旨、そして、どのように調査を進行するか、何を参加者に求めるのか、議論する主題は何なのかを貧困当事者に明確に伝えることが必要である（Beresford & Green & Lister et al. 1999, Bennett & Roberts 2004）。その理由は、参加型貧困調査でも、普通の会議などでも、議論をする前に明確な目的、主旨、主題を設けなければ、参加者は「何を話すのかわからない」となりがちで、かえって参加の制約となるから

---

<sup>8</sup> 参加者のプライバシーを保護する観点から、留学生のグループを含む外国人の4グループでの議論は具体的に何語で行ったのかについて、その説明を控えるが、どのグループでもコミュニケーション上の問題がなく、スムーズに行われた。

である。そのため、調査実施者は事前に調査の目的、主旨、そして、議論の主題を提示できるように、以下の議論のプラットフォーム（表2）を作った。そこでの情報も事前に参加者と共有した。

### 1) 議論のプラットフォーム

以下の表2のプラットフォームを作る際に「貧困当事者が自分の思いや関心を調査の具体的な議論に組み込める」ことを前提としている。これを設計する際に、主に参考した先行研究は「Poverty First Hand」（以後「PFH」）、「Engaging and empowering women in poverty」（以後「Women」）、「A child's-eye view of social difference」（以後「Child」）<sup>9</sup>である。

具体的には、まず、「PFH」に関して、この調査では貧困経験を持つ人々からなった20グループごとのディスカッションが行われた。そこで「貧困に関する言葉やイメージ」についての議論から、従来の貧困に関する“用語”について、多くの参加者はそれがスティグマ的であり、ステレオタイプをもたらしたと言いながら強い抵抗感を示した。次に「Women」では、参加者全員に「私にとって、貧困の意味は〇〇である」というセンテンスを作ってもらって、そして、それについて話し合うことによって、貧困に対する考えや見解などが参加者のなかで共有されて、貧困に対する共通理解が構築できた。このことが、この調査の後半で行った政策提案の円滑的な進行にもつながった。最後に「Child」では「PFH」で行った「貧困の言葉やイメージ」についての議論と同様に、子どもたちが見た「貧しい」「金持ち」「上層（Posh）」「下層（Chavs）」はどのような意味なのかを先に話し合った。そのうえで子どもたちが自分にとって重要なことを話してもらうことで、4つの共通関心がある話題を特定できた。

以上の先行研究からの示唆を受けて、日本社会においても、これまでに議論されてきた貧困に関する言葉やイメージについて、貧困当事者がどのように受け止めているのか、それに対して貧困当事者たちが見た貧困の意味は何であるかを主体側から表すことが重要である。なぜなら、貧困の概念や定義の構築に関わるからである。そのため、上記の「PFH」「Women」「Child」での調査手法を参照し、以下の表2での1回目の大枠の主題—「貧困の言説・イメージ、貧困の意味、誰が貧困であるか・貧困でないか・何で区別するかを話し合う」こと—を設定した。また貧困当事者から見た「貧困」だけではなく、貧困当事者が日々の生活のなかでどのようなことを心配し困っているのか、それに対してどのように対応しているのか、つまり貧困当事者が経験した「貧困」とそこから示されているエイジェンシーについての探究も大事だと考えられる。なぜなら、貧困や貧困当事者に関するステレオタイプ化に挑戦するには役に立つからである。そのため、1回目の議論で共有された貧困理解を土台として、その上に貧困当事者自身の関心がある課題—「心配・困りごと」—を以下の表2での2回目の大枠の主題として設定した。なお、上記のいずれの先行研究においても、より正確な調査結果を得られるために、調査結果を参加者に確認してもらっていた。本調査でも、その確認作業ができるように、3回目の集まりを設けた。

<sup>9</sup> ここであげられている先行研究についての紹介は、日本語文献には陳（2021）がある。

表2 議論のプラットフォーム

全体の目的	「貧困とはなにか」を貧困当事者の主体側から理解すること		
回 目	1回目	2回目	3回目
その回の目的	貧困当事者が見た「貧困」を表す。	貧困当事者が経験した「貧困」を示す。	貧困当事者が調査結果を確認する。
主 旨	具体的な話題の提起に向けて、議論の基礎を作りながら貧困当事者の共通認識を構築する。	貧困当事者から自分たちの関心を調査の話題に組み込む。	調査実施者の恣意的な理解を防ぐ、貧困当事者の「声」を正確に反映する。
主 題	貧困に関する言説・イメージを議論し、自分にとっての貧困の意味、そして、誰が貧困者であるか・貧困者でないか・何で区別するかを話し合う。	1回目の最後に紙に記入してくれた「心配・困りごと」をリストアップし、これらの課題を2回目の話題として議論を行う。	調査の結果確認やコメントをする。

調査を実施する際に、上記の大枠の主題を紙に印刷し、目的や主旨を含めて参加者と共有し、内容についても話し合い、合意を得た。そして調査自体は、1つのグループにつき3回の集まりで行った。3回に分けて行う理由は主に次である。①議論の内容が多く1回で長時間の議論を行うのは参加者の心身への負荷となる恐れがある。②参加者は様々な事情を抱えているため日々のスケジュールが非常にタイトであり、一日を費やす調査参加が難しい。③集まりごとに時間の間隔をあけることで、議論した内容を、集まりの後でも継続的に考える機会が与えられる。それにより、前回にうまく言えなかったことや新たに気づいたことがあれば、次の集まりの時に加えるなどをして議論自体を毎回深めることができる。

## 2) 話題の提起

まず、1回目についてである。最初に、議論を開始前に参加者に対して改めて調査説明を行い、調査の目的、主旨、主題について参加者が完全に理解できてから調査を開始した。また調査説明をする際に、参加者に調査全体の大枠や進行について何か変えたいところがあれば変更可能とのことを伝え、参加者にコメントをもらうようにした。そしてこの議論のプラットフォームに沿う必要はなく、これはあくまで皆の議論をスムーズに進めるように作成した「大枠」に過ぎないとの旨を参加者と共有した。これに対して、全てのグループが「今すぐに加えたい具体的な話題は思いつかないが、とりえずプラットフォームに沿って話していく、そのうちに何か思いつくことがあればその場でまた言う」ようにしてほしいと希望した。調査実施者はそれを受けて、参加者の意思に沿って、全員と合意を取ってから調査を始めた。

1回目の集まりは、具体的な個人的な内容を議論するよりは一般的な貧困に対する認識や見方を議論する方が進めやすいと考えられる。そのため、最初に主に「貧困」や「貧困」と関連する「アンダークラス (Underclass)」、「社会的排除 (Social Exclusion)」<sup>10</sup>などの言葉についてのイメージや理解を議論してみた。その次に、「私にとって貧困の意味は〇〇である」と

いうセンテンスをつくるように話してもらって、貧困当事者自身が考えた貧困の意味を参加者同士と話し合った。最後に参加者の目線から「誰が貧困者である・でない、なにで区別する」について議論してみた。

以上、貧困の概念・定義に関する最も基礎的な内容を議論した。そこで、参加者はそれぞれの思う貧困は「このようなものだ」「こういう思いを持っているんだ」「自分と同じ思いだ」とお互いにより知ることができ、参加者同士の関係も近くなり、さらにこのような参加型の議論方式にも慣れることができた。

次に、2回目についてである。2回目の議論は、1回目の議論から得られた内容をもとに行われた。具体的に1回目の議論の最後に、2回目の具体的な話題を提起するために「今の生活で、心配・困っていること」を紙に無記名で書いてもらうようにした。調査実施者が、回収した情報を整理し、そこでの共通項目をリストアップして、2回目の具体的な話題とした。こうしたことによって、参加者は本当に関心があることを具体的な話題として提起できた。

実際の議論の場では、参加者たちは既に1回目の議論を経験し、貧困についての共通認識を一定程度構築できたため、活発な議論となり、また内容も多岐にわたった。例えば、日本人社会人女性グループでは、生活保護や就学援助などの公的援助政策に対する評価や希望、制度利用などについて、たくさんの情報や意見を交換することができ、さらに、メディアや行政部門からの自分たちに対する扱い方や態度、援助そのものの本来のあり方などにも言及した。

最後は、3回目についてである。これまで1回目、2回目の議論を行う時に、参加者には、うまく喋れないことや、間違えて喋ってしまうことを心配せずに安心して話せるようにするために、「最後の3回目の時に、確認したり見直したりすることもできる」と既に伝えている。今回の3回目の集まりでは、主に調査結果（調査実施者が整理した1回目と2回目の議論の逐語録）の確認という作業を行った。そこでの具体的な作業に関して、論文の第4節で詳しく紹介する。3回目の集まりでは、調査結果の確認以外に、調査参加についてのコメントや感想なども話し合った。

## (2) 議論の展開

グループディスカッションで対応した。Lister & Beresford (2019:298)によれば、貧困研究でより一般的に用いられている個人へのインタビューではなく、グループディスカッションを使用するのは、参加者が調査過程をもっとコントロールできるようにし、自分の考えを表現したり発展させたりするためのより良い機会を提供するという信念を反映している<sup>11</sup>。本調査でも同様な考えで、調査実施者は主にファシリテーターとなり、参加者たちが主体となってグループディスカッションをする形で調査を進めた。そして、調査実施者は発言を可能な限り

<sup>10</sup> ここでの「アンダークラス」と「社会的排除」の2つとも欧米社会からの渡来用語であるが、その影響を受けて近年は日本においても貧困の関連用語として頻繁に議論されている（例えば、橋本 2018, 2020；宮本みち子・佐藤洋作・宮本太郎 2021；志賀 2016など）。

<sup>11</sup> そのため、「参加型貧困調査」での「参加型」の性質を言うと、それは「当事者が情報を意味があるようにすることに関与できることを一必ずしもインタビュー調査やグループディスカッションそれ自体を進めるということではなく—調査過程の重要な部分とみなす」ことである(International Institute of Environment and Development 1999, Bennett & Roberts 2004-Full Report:51)。

抑えて、参加者たちが自由に発言できるように意識した。そうすることで、権力関係の不平等の問題を避けると同時に、議論自体も活発に主体的に展開していくことができています。

### 1) 権力不平等の回避

本調査では、参加者たちのグループディスカッションを通して貧困を議論していくことによって、インタビュー調査のような調査実施者と調査参加者との1対1の形で、調査参加者が調査・質問され回答を求められるような緊張感を回避できる。

一方、グループディスカッションで調査を進めると、調査実施者と調査参加者との権力の不平等は避けられるが、調査参加者同士の間での権力不平等の問題もまた考慮する必要がある。例えば本調査の参加者は同じ若者であるが、なかでは学生や社会人、日本人や外国人、男性や女性など、多様である。そこでの権力の差異がなるべく小さくなるように、本調査は表1で示しているように属性が同一の参加者を同じグループにするようにした。

### 2) インタラクティブな議論の進行と展開

議論は属性が同一の参加者をグループに組んで行ったため、参加者は共通の経験があり、お互いによく理解できる。

ただ参加者の多くは貧困に対する自分なりの知識や考えが確かにあるが、意見を表明する際に必ずしもいつもうまく話ができるわけではない（一般の人々も同様）。実際に調査の場でよくあったことは、ある話題に対して1人の参加者は言いたいことをうまく言葉にできず、結局一言だけにとどまったことである。このような時にグループディスカッションの形式を取ったことで、他の参加者がその人の発言に続いて話していく、或いはその発言について質問することもあった。これで、ある話題に対して議論が一言で終わってしまうことを避けることができ、議論自体も深まっていく効果が得られた。

例えば、以下の日本人社会人女性グループでの「子どもの習い事」についての議論では、①属性が同一の人を同じのグループに組み、②グループディスカッションを進めることによって、上記の「権力不平等の回避」と「インタラクティブな議論の進行と展開」の実際がよく示されている（日本人社会人女性グループの例）：

【話題の提起】<sup>12</sup>

B: 子どもの習い事してます？

↓

【お金が原因でしていないと返事】

D: してないです。お金かかるから。

↓

【質問】

A: 本人の意思としては、例えばプールに行きたいとか、そういう希望を普段の生活の対話のなかから、ポロっと出たりとかありますか。

<sup>12</sup> 括弧【】のなかは、筆者がその進行状況を示すために付した。

↓

## 【回答と今の対応】

D: うん、ちょいちょい出てくるんです、空手やりたいとか。でも、見たら、月2回とかで1万円ぐらい、それは高いな。それ考えたら、家でユーチューブを見ながらトレーニングだとか、絵を描くとか、お金かけなくても自分でできることをするしかない。今、空手とかはやっぱり無理だ。やらせたいけどね。

↓

## 【お互いの話を認めて支持し、共同の経験と知識から①原因と②解決策を具体化していく】

## ①原因

- A: 子どもが成長するいい機会っていうふうに世の中言うけど、やっぱり当事者からしたら、「そうなんだけど」みたいな感じで思いますよね。
- D: うん、そうなんだけど、なかなか…
- C: 結局、どんどんお金がかかるね。1回いれても、検定料とか、そして、また「〇〇（道具名）」が欲しくなったりとか、それだけのお金じゃなくて、どんどん増えていくから。（何かをやりたいたってても）すぐにいいよとかを言えないね。
- D: オッケーってゆったら、見学に行くとかなんで、オッケーって言えないな。

↓

## ②解決策

- D: 一番、最初にお金がかからないものを、勉強だったら、教材買わなくても算盤だったら、これがあればいいのかなとか、そういう安いものはいろいろ考えたりとかはし続けてきた。これからずっとって考えるのか、あるいは、それだけで妥協してやらせるのがいいか、それとも頭のいい友達にお勉強を頼むとか、いろいろ考えて、なるべくお金のかからないような方向に。
- B: できるだけ安く、その勉強を探したもんね。今は（自分の子どもが）友たちに誘われて、「〇〇」をやりたいたって、張り切ってやるならやらせてはいるけど、やっぱりお金かかるね、「〇〇（道具名）」が欲しいとかさ、お揃いの何か買いますとかさ、本当にお金がかかるから、「本当に続きますか」ってちょっと深刻な感じで話をするようにして、「続かないんだったらやめなさい」っていうふうにする。（日本人社会人女性グループ）

以上のように、同じグループでの参加者は年齢も経験もより似ているため（30代の女性、シングルマザーであり、生活保護受給経験もある）、話や質問がとてもしやすい環境である。また同様の貧困経験があるため、グループディスカッションをしていくなかで、お互いに認めて支持していくこともしばしばある。このように、「子どもに習い事をさせてない理由は何か」という質問に対して「お金がないから」という回答があるだけにとどまらず、参加者同士からの質問や補足などにより、「問題」に対して取った対応、「問題」の詳細な原因の分析、さらにその「問題」に対して、今の状況のなかで自分たちが考えている解決策まで議論が発展した。また、この議論が進行する過程には調査実施者からの関与は一切なく、参加者たち自身の思いや考えが集合的に表現されているといえる。

### 3) 参加者自身による言葉の説明

調査のなかで、参加者が自分たちの慣れている言葉（言い回しや用語など）を用いて話すのは当然である。ただし、生活の背景や環境が異なるため、調査実施者は調査参加者が話したことを全て理解できるわけではない。調査実施者は参加者たちの「声」がよくわからない時に「それはどういう意味ですか」と確認するが、発言者は自分が言っていることをうまく言葉で説明できない時もある。その場合に、共通経験を持ったほかの参加者が、発言者の代わりに発言を説明してくれる。時には調査実施者が確認する前に、調査実施者が多分わからないだろうと先回りして説明してくれることもある。このように、属性が同一の参加者のグループディスカッションで議論を行うことは、参加者の「声」の本当の意味を理解するための助けとなる。以下は調査実施中に実際にあった一場面である（外国人労働者男性グループの例）：

C: 私たちが家を離れて日本にくるのは、「〇〇」を求めているから。

調査実施者: 「〇〇」はどういう意味ですか？

D: それは「〇〇」、あるいは「〇〇」と言いますよ。心が安定で、落ち着くという意味です。

要は、家にいるといろんな義理人情とかが絡んでいて、その社会関係を維持することが結構大変で、心が落ち着かないです。

C: そう、日本に来ると、心が一旦そこから離れるんで。

調査実施者: なるほど。(外国人労働者男性グループ)

以上のように、調査をグループディスカッションで行ったことによって、調査実施上の課題である「権力不平等」の回避や「インタラクティブな議論の進行」が可能になるだけでなく、参加者が自分たちの「声」の本当の意味を説明してくれることによって、「声」を理解するための助けになっている。

## 4. 課題3－結果のアウトプット

調査結果は、基本的に参加者に確認してもらってからアウトプットするようにした。全体は2つのステップを経て進めた。ステップ1としては、調査実施者が1回目と2回目の集まりでの議論内容を整理し、参加者に確認をしてもらうようにした。この確認作業は主に3回目の集まりで行った。ステップ2としては、確認した内容の文章化（報告書や論文など）に向けて、調査結果をどのように扱いたいかを参加者に伺い、参加者の要求や希望、そして（参加者全員が調査開始前に合意した）本調査の目的と主旨に沿って、内容をさらに統合整理した。この作業の前半（調査結果の扱い方についての確認）は3回目の集まりの中で行った。後半（実際な文章化への執筆作業）は主に3回目の集まりが終わってから行ったが、前半で確認した参加者たちの意思を尊重し、それを規範としたうえでの作業となった。以下、ここでのステップ1とステップ2を「調査結果の確認」と「文章化の方向性」として、各ステップでの具体的なまとめ方を述べていきたい。

### (1) 調査結果の確認

ステップ1では、実施者が1回目と2回目の集まりでの議論内容を逐語録に作成し、3回目の集まりの時に参加者に配布し、内容を参加者に確認、補足、コメントをしてもらった。これまでの8つのグループとの確認では、調査実施者側の大きな理解のズレは特になかったが、ところどころで、言葉や内容の訂正などがあった。

微修正であるが、示された貧困当事者の「声」のニュアンスが変わることもある。例えば、留学生グループでは「いつも安い食べ物を買う」という議論からまとめた結果について、参加者から以下の訂正をしてくれた：

「〇〇」ページのお肉は、私はあまり日本産を買わなくて、「〇〇」産（安い）を買いますと書かれています、記憶には「あまり日本産を買わない」ではなく、「一回も日本産を買ったことがない」と言った。（外国人留学生男性グループ）

また、初回に集まった時に話したことを、今回改めて確認してみたところ、やはり適切ではないから削除してほしいとの要望もあった：

「〇〇」ページの私が話した「〇〇」、この話は当時どういう思いで話したかは覚えていないですけど、やっぱり自分の今の考えと少しずれているので、削除したほうがいいかな。（日本人学生男性グループ）

以上のように、3回目の集まりで、参加者全員が調査結果をスクリーニングし、言葉の訂正、内容の添削などの確認作業が行われた。

### (2) 文章化の方向性

上記のステップ1の確認作業を通して、調査から得られた様々な「声」に対して、基本的に誤解なく参加者の意思に沿った内容を整理できた。ただ、これらの内容はあくまで準調査報告書レベルの逐語録や議事録のようなものであり、そのままでは報告書や論文などの公表文章にはならない<sup>13</sup>。報告書や論文にする際には、内容をさらに整理統合し、取捨選択しなければならない。以下は、実際にその内容をどのように整理し表すのかについて、その具体的な作業の方向性を第1～第6までの6点に整理し説明する。

#### 1) 参加者の要求や希望に従うこと

3回目の集まりで、調査結果の確認作業を行う際に、これまでの議論から得られた沢山の貧困に対する考えや見解をどのように扱い表現するのかに関して、参加者は自分たちの要求や希望を表明した。以下はその一部である：

私が覚えているのは、この前の議論は、全体の雰囲気結構「力」があって、お互いにと

<sup>13</sup> 調査では、どのグループでも何等かの形で自分たちの「声」を公表し、より多くの人に届けたいという意見があった。

でも励ました感じでしたが、この文字だけで読むとちょっと感覚が違います。ここに書かれている文字は確かに全て私たちが言った内容ですが、もっとその時の雰囲気も説明に入れてほしいです。私は悲しいことを訴えているような存在として描かれたくない、もっと「力」があるような表現でできたらいいなあ。(外国人留学生女性グループ)

今回は沢山貧困についての話をしたけど、これからこの研究を進むなかで、私たちの意見を曲げちゃわないようにしなきゃ。意見を変えて解釈したら意味がないなあと思います。(日本人社会人男性グループ)

今回は、私たちのグループ以外に、他のグループもあるよね。その共通点とか、また、違うところとかを、どのようにバランスを取って表すのかは、ちょっと気になって、これは「一調査実施者一」の課題になりますかね。(日本人学生男性グループ)

上記の参加者の話を受けて、調査実施者は調査結果をともに文章化する際に、以下の第1～第2のように対応している。

第1に、調査結果の扱いは、原則として参加者からの要求や希望を最優先とする。それに従って、議論の現場での参加者たちの表情やボディランゲージなどを含めて、その場での雰囲気をできるだけ再現し、参加者たちの貧困に対する分析を主要内容にする。調査実施者の思い込みや分析をできるだけ最小限にする。

第2に、参加者が確認済みの調査結果を調査実施者が本調査の目的と主旨に沿って、各グループに共通する部分を抽出し統合する作業を行う。それ以外に、全てのグループで共通する内容ではないが、ある一つ、或いは一部のグループが有する特徴が示されている内容も取り上げる。そうすることで、貧困認識における共通点と差異を同時に保つことができるようにする。

例えば「社会的排除」に対する思いやイメージを議論する際に、以下のような共通点と異なる内容が同時に表されている。筆者は以下のように内容をまとめている。

#### ① 各グループからの意見が共通する場合

ほとんどの参加者は「社会的排除」にネガティブなイメージを抱いていること、そして社会的活動に参加できず、社会に溶け込むことができないという意味で捉えている：

職場で、友達グループが「飲みに行くか」みたいな時に、自分は金ないから行けないとき、社会的排除された気がします。自分の社会性を奪われる意味と感じています。(日本人社会人男性グループ)

以上のように、違うグループで同様な意見があって、筆者は主に「ほとんどの参加者」は「○」という見解を持っていると表記し、そして、簡潔で分かりやすいグループでの発言を代表的な「声」として取り上げる。

## ② 各グループから多様な意見がある場合<sup>14</sup>：

ただ、上記以外に、8グループのうち、2つのグループでは、「主流に合わないといけないようなプレッシャー」を感じている話もあった：

私は離婚経験した。私は「〇〇」歳ですけど、この歳だったら、結婚をして、子どもがいる方、そして、独身で何か仕事をされている方、その2種類ぐらいしか社会から認められてない感じがする。（日本人社会人女性グループ）

住んでいる寮は「ごっつぁん」するんですよ。奢りたくないというと、「これは寮の文化」だとみたいなことを言われるんで。多分その「寮の文化だ」って言っている人たちは、やっぱりみんなは「〇〇（大学）」生だから、みんなの家は同じくらいの年取（より高い）は持っているって仮に思っているよね。ただ自分は、実家の妹弟がパスタ茹でているやつを食べているのに、なんで後輩にご飯を奢るんだろう。そもそも「ごっつぁん」っていう文化自体が矛盾をはらんでいるのを感じて、すごく反抗しようと頑張っています。（日本人学生男性グループ）

また、日本人学生女性グループの1人の参加者は、それほど悪いイメージを感じない、この言葉を使うと他のメリットもあるという考えもあった。その考えを説明したら、他の参加者からも「なるほど」と賛意を表された。

社会的排除された人、ここ数年、いままでその存在しない人として扱われてきた。例えば、教育受けることができなくて、どんどん居場所がなくなって、排除されて、見えなくされている。でも「私達は生きているし、ここにいるよ」っていうふうに考えるときに、そうされた人がいるんだよっていう証拠になることはあるのかなと思って、そんなに悪いイメージは受けなかった。（日本人学生女性グループ）

上記のように、議論は属性の異なるグループごとに行っても、各グループから示された共通点と差異に関して、「8グループの全部／のうち〇〇グループは・・・」や「少数／一部／ほとんどの参加者は・・・」と表記すること、また、各グループ間の共通点ではないが、あるグループなかではより意見が統一されている内容も並列することによって、議論の全体像を概括的に把握できると同時に、そのうちどれぐらい、どのような差異があるかもよく示すことができる。

## 2) 必要最小限のテクニカルな処理

前節では、グループディスカッションを取ったことで、議論をどのように進めたのかを、実際の調査現場での様子の一部を用いて説明した。ただ、議論の全体を見ると、全てが【3.(2)】で紹介したように、1人が何かを言って、もう一人はその話を受けて続けて話をしていく、と

<sup>14</sup> 以下で示している内容以外の意見もあったが、ここではそれぞれの意見をどのように文章化して表すかを説明するために、一部のみ取り上げている。

いったような進行ではなかった。実際は、1つの話題について参加者が一人ひとり自分なりの考えを先に言い出すこともよくある。参加者の大多数は自分のなかでずっと考えてきた自分にとって大事な「優先する話」があるため、少し関連する話が出れば、すぐにその「優先する話」を先に言う場面がよく見られた。そのため、貧困当事者の「声」や議論する際の様子をより正確に表現できるように、以下の2つの糸で並行にしながら調査結果やデータを文章にまとめていく。

- ・糸1：グループディスカッションであるからこそ、示された議論の様子と内容をまとめて提示する。例えば、前述の【3.(2)】で示されているような形である。
- ・糸2：上記の糸1以外の内容を、参加者全員が合意をとれた本調査研究の目的と主旨を中心にまとめて提示する。その際に、以下の第3～第6で示しているように、議論の現場での「事実」を尊重したうえで、必要に応じて、最小限に執筆上のテクニカルな手がかりを行った。

第3に、貧困当事者が見た貧困の全体像を描くために、同じグループでの異なる回の集まりで議論した内容を前後に微調整すること。

例えば、日本人社会人女性グループでは、1人の参加者は1回目の時にメディア上に「貧困」に関する報道に対して不満を表した場合がある。

メディアで「貧困」この言葉が使われてすぎて、シミついているっていうか、私達自身にもそういうふうにインプットされているのになあっていうのはありますよね。でも、発信しているのは当事者ではないですよね。そのコメンテーターの人とか、本当にそういう状況になったことない人たちが傍から傍観者としてこう発信していることなんで、響かないですよ、そのメディアがやっていること。本当にね、メディアは「クソ」だな。(日本人社会人女性グループ)

2回目の時に、参加者お互いに既に知り合って、調査実施者に対しても一定程度の信頼ができた。このような調査環境では、前回の集まりで議論した内容に関して、その際に言えなかった・保留した部分を今回の議論の中にまた加えることがよくあった。例えば、上記の1回目の際になぜメディアに対してそんな思いを持つのかの背景を教えてくれた。

2012年の時にすごいバッシングがあって、芸能人の親が生活保護を受けて、「なんでお金あげてないんだ」と「不正だろう」みたいなのが取り出されたときに、ちょうど私が生活保護を受けて、自分も攻撃されているような気持ちで、その時はすごいいたたまれないと感じている。その分、取材もすごかった。記者が来たのよ、自分はテレビにも出た。やっぱり、その芸能人のニュースとか、いろいろ社会でそういうことがあって、「実際はそうじゃない」「ずるいとかじゃなくて、どうしてもその生活で利用しなきゃいけない人がいるんだ」というのを(社会に)届けたかったです。だけど、そういう意図するものは届かなかった。私の取材の仕方、私は記者に丸一日密着されて、離婚したときに子どもには我慢させたくないなどの話をしたら、カメラマンが号泣しちゃって、そして職場まで来てくれて、仕事しながら

ら資格も取りたいとあって、結局放映されたけど、「〇〇（地名）」のゴミ屋敷みたいなのところに住んでいる生活保護の人も一緒に報道されたんですね。結局、私のところはさらっとスルーだけで、そのゴミ屋敷の人、そっちの家汚い、子どもも結構いっぱいいたのがバッシングみたいなのになって、結局自己責任って、その方がたくさん内容が取り上げててる感じです。そっちが悪く取られていることでショックを受けた。意図する部分が伝わらなくて、また生活保護の人がずるいか、だらしのないみたいな報道になっちゃった。だからね、メディアではその悪いニュースしか入らない、悪いイメージや正しくない知識が結局広がっている。（日本人社会人女性グループ）

また、上記のように次回の集まりまで待つのではなく、調査参加者が家に帰った後で考え続け、補足したくなり、直接に調査実施者に連絡することもある。例えば日本人社会人男子グループでは、1回目の集まりの翌日に参加者から以下のようなLINEメッセージが来た：

おはようございます。「〇〇さん（調査実施者）」、昨日の内容を考え続けていました。貧困の基準の時に、私が言ってた「生きるだけでなく+ $\alpha$ があるか」って所がうまく伝えられてなかったと思うからです。今思う正しい表現は、「安い物以外を買う選択肢があるかどうか」です。一応伝えたくて、連絡しました。研究、頑張りましょう。（日本人社会人男性グループ）

上記のようなコメントが出てきた理由は、議論が間隔をあけて行って、集まりと集まりの間、「貧困」について、参加者の考えがさらに整理できたことと考えられる。このような、後から追加や補足してくれた内容については、本研究では貧困当事者が考えた「貧困」についての断片的な記述を避けるため、より総合的に提示できるように、違う回で議論した内容を前倒しや後倒しなどの微調整をしながら調査結果をまとめている。

第4に、貧困当事者の話では前後に矛盾があった時に、それを確認し、確認が取れた参加者の本当の意思を取り上げる。

これは上記の【第3】と関連するが、議論の集まりを、間隔を開けて3回に分けて行っていくなかで、参加者の考えが前後で矛盾したことも時折あった。また、同じ回目の集まりのなかでも、議論していくなかでほかの人の発言を聞いて、自分の考えを見直したこともあった。このような内容については、参加者の本当の意思を見極めることが必要である。これに関して、調査実施者はその場で参加者に確認し、そして、次回の集まりの時に議事録を持参して参加者に再度確認するようにした。また調査進行中に、矛盾がありそうな話を聞いた時は、調査実施者だけではなく、他の参加者もその場ですぐに確認することもあった。例えば留学生のグループでは「ニート」について、以下のような議論をする場面があった：

A: 私は、これらの人たち（ニート）は道徳から言うとはよくない人たちだと思います。私が言いたいのは、あなたは手も足もあるのに、何で頑張らないの？（外国人留学生グループ男）

参加者Aは、議論していくなかで、他の参加者の意見を聞いて自分の発言内容を見直した。

例えば上記のAの発言の後に、以下のように、参加者Cがこの言葉（ニート）は人を誤解しラベリングする側面もあると自らの経験から述べた。このCの発言をきっかけに、Aは自分の先の考えを見直した：

- C： 貧困ってうか、弱い立場にいるから、容易にこの言葉を人に使われて、私はこれをひどいと思います。私は「〇〇（過去の事情）」で、彼らは私のことをよく理解していない段階に、既に私に“帽子”をかぶせている（＝ラベリング）、私は「〇〇（過去の事情）」でしばらく家にいたただけです。人々は勝手に私に「ニート」と言って、でも、私がなぜこんな状況になったのかを誰も尋ねていなかったです。
- A： これはラベリングですね、確かによくないです。
- B： さっき、あなた自分もまだそのような人たちは道徳上に問題があると言っているのに、なぜ今またよくないと思うの？
- A： すみません、Cさんの話を聞いて、よく考えると、このような言葉こそ、人が容易に他の人を偏見的にみることになる面もあると思いました。例えばCさんのように、ある人が家にいるのは、何かを勉強しているか、何かを計画しているか、あるいは、自分の力を蓄積しているか、様々な可能性がありますね。ただこのような言葉の存在で、容易に人を評価することになって、人に偏見的な影響をもたらしていますね。今はこう思います。（外国人留学生男性グループ）

これらの一連の確認作業を通して、参加者の「本当の意思」を理解し、また有用な情報を整理しやすくなった。このように、前後で矛盾する議論内容に関して調査内容を文章化する際には、参加者が他の参加者の意見を聞いたり考えたりしたのちに確定した意思をメインに取り上げる<sup>15</sup>。

第5に、議論する際に、話しながら自分の考えを整理する時間を参加者に与えるため、主題と関係ない話や冗談などを喋っても構わないことにした。ただ、その内容を整理する際には主題と関連する内容を中心に取り上げる。一方、主題と明らかに外れている内容を削除する。

参加者たちは、普段の生活のなかで貧困について誰かと話をすることや皆の前で意見表明することがめったにないため、集まりで迷わずにすぐにまとまりのある話ができるわけではない。実際の議論のなかでよくあったこととして、例えば、参加者の誰かが何かについて話しをする際に、主題と直接関係がないような話が最初に出てきて、その話は参加者の生活背景と何等かの関連があるかもしれないが、話の内容自体はかなり分散的である。これに対して、調査実施者はできるだけ参加者の話を邪魔したり中断したりしないように、自由に話せるようにする。そうすると、初めは内容が少し混乱するものの、発言の後半や終盤の段階では、比較的整理できた話がよく出てくる。例えば留学生のグループでは「私にとっての貧困の意味」について、以下のような長い話（逐語録はワード2ページ程度）があったが、前半は主に自分の本国での就学や来日の経過、そして、日本での仕事についての話であった。それを全て言い終わると、

<sup>15</sup> もちろん、議論するなかで参加者の意思がどのように変わったかに関する考察も重要課題であるため、これに関する内容について、必要に応じて部分的に取り上げる。

実際の日本での具体的な経験事をあげながら「貧困は差別である」とまとめた。

日本に「〇〇」という概念があることを、皆さんは知っていますか？私は中学校時代に高校、そして大学ではなく専門学校に入ったんです・・・一自国の出身専門学校やその学校での教師についての話（冗談）・・・18歳の時に、日本への出稼ぎの人員募集の情報をもらいました・・・どのように来日の意味を決定したのかの話・・・「〇〇（年）」に「〇〇」、つまり皆が言っている「〇〇」として日本に来ました・・・日本での仕事に関する内容・・・その後、契約期間満了後、私は日本の大学に通いたかったが、日本の学校に認められなかったんで。あなたは「〇〇（日本で従事した仕事に関する内容）」、ダメって、どうしても認められなかったんです。これは差別でしょう。もし、私はお金があれば、状況を変えられるかもしれない、私は弁護士や行政書士に助けを求めることができます。その後、私はお金がないと何もできなくて、社会的地位を変えることもできないと深く分かって、一旦帰国し、働きながらお金を節約し、今やっと留学生の身分として日本に来られました。なので、私は、貧困は「差別」だと思います。（外国人留学生女性）

筆者は上記を受けて、主題である「私にとっての貧困の意味」を中心に、話の内容を次のように、主に参加者がよく整理できた話（多くの場合は発言の後半）を中心にし、以下のように整理している。

私にとって貧困の意味は差別です。私は「〇〇（年）」に「〇〇」として日本に来ました。その後、契約期間満了後、私は日本で学校に通いたかったが、日本の学校に認められませんでした。あなたは「〇〇」だから、ダメって言われました。これは差別でしょう。もし、私はお金があれば、状況を変えられるかもしれないです。弁護士や行政書士に助けを求めることができます。その後、私はお金がないと何もできず、社会的地位を変えることもできないと分かりました。帰国後、働きながら、お金も節約し、今やっと留学生の身分として再び日本に来られました。（外国人留学女性グループ）

第6に、調査参加者のプライバシーの保護に努めた。

まず、参加者の「声」を取り上げる際に、個人を特定できる情報を全部「〇〇」で空白にしている。その際に、閱讀上に支障がないように、例えば、参加者が通っている学校名が会話のなかに言及された場合に、具体的な学校名を表示せず、「〇〇（学校名）」で示す。また、場合によって「〇〇」だけで表示することもある。

また、参加者のなかで議論がどのように展開しているかを示すためにA, B, C, Dで参加者たちの話す順を示しているが、通編を通して発言を探って参加者を特定できないように、話題ごとで用いるA, B, C, Dが同一参加者を示さないようにアレンジした。

## 5. まとめ

以上、2021年の約1年間で実施した参加型貧困調査について、その調査の手続きを中心に検討した。そこで、調査の全過程—調査参加者の募集、調査の進行、調査結果のアウトプット—において、参加型貧困調査にとって最も重要である調査参加者である貧困当事者の「参加」を保障するために、調査実施にあたって実際にどのような課題や難点があったのか、それに対して具体的にどのような対応で調査を進めてきたのかを検討した。その内容は主に以下の3点にまとめることができる。

第1に、調査参加者を募集する段階で、調査に関する情報の伝達と調査環境の整備が主要課題だった。前者の調査情報の伝達に関して、弱い立場にいる参加者であるほど情報が届きにくい。本調査では、参加者が、信頼できる中間協力者やこれまでに付き合いがある反貧困組織からの協力を得たことで、情報を、断片的ではなくより完全に理解しやすいように伝達できた。そして後者の調査環境に関して、如何に参加者たちが制約を受けずに、負担を感じずに、安全、安心、そして尊重されていると感じられるように参加できるかに関して、本調査では、調査の場所、時間、金銭的サポート（謝礼）、そして、それ以外のサポートとして車の送迎、食事の用意、文字書きの手伝いなど、参加しやすいような環境整備を行った。そのなかで、参加者の調査参加への意思決定にとって特に重要な役割を果たしたのは、中間協力者と協力組織からの参加者への付き添いやフォローであった。

第2に、調査を進行する段階においては、参加者たちの自分の思いや関心を調査の具体的な議論に組み込めること、そして、その内容について、主体的に議論ができることが重要な課題であった。これに対して、本調査では、先行研究（調査）からの示唆を受けながら、参加者たちが議論しやすいように、議論のプラットフォームを作成し、調査の目的、主旨、集まりごとの大枠の主題を参加者に提示した。そこで「私にとって、貧困の意味は〇〇である（第1回目）」「心配・困りごと（第2回目）」「調査の結果確認とコメント（第3回目）」などのオープンな主題の設定によって、参加者自身が最も関心のあることを具体的な話題として提起できた。このように提起した具体的な話題を議論する際に、参加者たちが、調査実施者の考えや思い込みに影響されずに、主体的に議論を進行し展開していくことができるように、本調査では属性が同一の参加者が一つのグループになって、グループディスカッションを行うことで対応した。このように、より似た貧困経験を持っている参加者たちが、お互いに理解し合って、権力上の不平等もなく、主体的に議論を進行し展開した。その際に、調査実施者は単なるファシリテーターとなった。

第3に、調査の結果に関して、本調査では参加者たちの確認やコメントを経てからアウトプットにしている。調査参加者は、ただ研究者等に調査されて個人の悲しいストーリーを提供するための“道具”ではなく、参加者自身が調査の過程をもっとコントロールできるようにし、そして調査結果の扱いにも自分なりの影響を与えることができるようにすることは、参加型貧困調査が従うべき原則である。そのため本調査では、参加者たちが自分の「声」により生成した調査結果を改めて確認できる機会を設けた（第3回目）。そこで、参加者たちは、内容の確認だけでなく、調査結果の扱い方にも自分たちの要求や希望を発した。これを受けて、今後これらの調査結果やデータをもとに文章化していく際に、調査実施者は事実を尊重した上で必要

最小限の執筆上のテクニカルな処理を行う以外は、基本的に参加者たちの意思や貧困に対する分析を最優先とした。

以上参加型貧困調査の実施について、「参加」に向けた調査の手続きを解説・検討した。本論文が、今後の貧困研究における貧困当事者を包摂するさらなる実証調査の展開を検討する材料になればと思う。

## 文献

- Bennett, F. and Roberts, M. (2004) *Participatory approaches to research on poverty* (URL: <https://www.jrf.org.uk/report/participatory-approaches-research-poverty>最終アクセス日: 2021年12月1日), *From input to influence, participatory approaches to research and inquiry into poverty* (Full Report), Joseph Rowntree Foundation.
- Beresford, P. and Croft, S. (1995) It's our problem too! Challenging the exclusion of poor people from poverty discourse, *Critical Social Policy*, 44/45, 75-95.
- Beresford, P. and Green, D. and Lister, R. and Woodard, K. (1999) *Poverty first hand: Poor people speak for themselves*, Child Poverty Action Group.
- 陳勝 (2021) 「貧困当事者を包摂する参加型貧困調査実施上の課題」『北海道社会福祉研究』第43号, 24-43。
- Commission on Poverty, Participation and Power. (2000) *Listen hear: The right to be heard*, The Policy Press.
- 橋本健二 (2018) 『アンダークラス—新たな下層階級の出現』筑摩書房。
- 橋本健二 (2020) 『アンダークラス2030—置き去りにされる「氷河期世代」』毎日新聞出版社。
- International Institute of Environment and Development* (1999) PLA Notes 34.
- Lister, R. and Beresford, P. (with Green, D. and Woodard, K.) (2019) Where are 'the Poor' in the Future of Poverty Research? In J. Bradshaw and R. Sainsbury (eds), *Researching Poverty*, Aldershot: Ashgate, 284-304.
- 宮本みち子・佐藤洋作・宮本太郎 (2021) 『アンダークラス化する若者たち—生活保障をどう立て直すか』明石書店。
- 志賀信夫 (2016) 『貧困理論の再検討—相対的貧困から社会的排除へ』法律文化社。
- Sutton, L. Smith, N. Dearden, C. and Middleton, S. (2007) *A child's-eye view of social difference* (URL: <https://www.jrf.org.uk/report/childs-eye-view-social-difference> 最終アクセス日: 2021年12月1日), Joseph Rowntree Foundation.
- Women's Budget Group. (2008) *Engaging and empowering women in poverty* (URL: <https://www.jrf.org.uk/report/engaging-and-empowering-women-poverty> 最終アクセス日: 2021年12月1日), *Women and poverty: experience, empowerment and engagement* (Full Report), Joseph Rowntree Foundation.

# The implementation of the Participatory Poverty Research: Focusing on the procedures of the Research for ‘Participation’

Sheng CHEN

## Key Words

Poor People, Participation, Participatory Poverty Research, Research Procedures

## Abstract

This paper examined the specific challenges and necessary responses to the issues raised by previous research on implementing participatory poverty research through an actual survey. The results are as follows: (1) Regarding the recruitment of participants, the challenges were information dissemination and environment setting for the research. To resolve these problems, the cooperation of intermediaries and anti-poverty organizations, setting up of places and schedules for easy participation, and a range of support, including financial, were needed. (2) Regarding the research progress, the challenges were setting the agenda and developing the discussion. A discussion platform was designed to address these problems, wherein the aim, general and open subject of the research were presented. The platform played a part in allowing the participants to bring their interests into the discussion. Then, utilizing group discussions helped avoid power inequalities, promoted the interactive progress and development of the discussions, and enabled participants to interpret their own words. (3) Regarding the research results, they were confirmed and commented on by the participants. Hence, the research outcome, not only the content but also the expression of the text, was further verified by the participants.

